

「中国における地域文化研究及び言語研究」特集について

本号は「中国における地域文化研究及び言語研究」と題した中国研究の特集となっている。はじめに、『成城文藝』編集委員会の了解をえて本特集が計画された経緯と、掲載論文について記しておきたい。

本特集を計画した劉穎は、石村広（文芸学部）、小澤正人（社会イノベーション学部）と共に「中国における地域文化の研究」をテーマとして二〇〇五・二〇〇六年度成城大学特別研究助成（研究代表者：劉穎。なお石村は二〇〇六年度海外研修のため二〇〇五年度のみ）をうけた。

これは現在中国研究の各分野で注目をされている地域文化を取り上げ、研究分野を異にする三人がそれぞれ個別研究をおこなうと共に、定期的に研究会を開きそれぞれの研究成果を報告し討論することを通して、中国における地域文化のあり方を考えることを目的とした共同研究であった。二〇〇五年度から上記の研究を始めたが、研究を進める

中で共同研究として成果をまとめて発表することとなり、本研究が成城大学内の研究助成を受けている関係から、発表誌は、研究代表者である劉穎の所属する文芸学部の紀要である『成城文藝』が適当であると考えた。

また近年における中国語履修を希望する学生の増加に伴い、多くの先生方に中国語教育に携わっていただいております。各先生方からも論文をお寄せいただければ、中国研究の特集とすることも可能だと考えた。そこで内々に打診したところ、幸い四名の先生方から御快諾をいただいた。そして予定の論文の内容を考慮して、特集のテーマを「中国における地域文化研究及び言語研究」とすることにした。

以上の準備を整えた上で、発行者である戸部学部長と編集委員会に中国研究特集号の提案をしたところ、幸いご承認を得ることができ、本号の発行に至ったのである。

本特集号の内容は地域研究に関わるものと、言語研究と

に分かれる。

地域研究としては、劉穎「女書旋法」と城関土話の声調との関係における考察」、小澤正人「山東青州龍興寺窖藏出土北齊如来立像考」、費燕「新疆におけるウイグル族の中国語教育、学習の現状について」、于洋「中国における格差問題と社会保障改革」の四編がある。

劉（穎）は湖南省江永県にのみ伝わる地域性の強い「女書」の研究を進めているが、今回はその曲調の特徴について考察を加えた。

小澤は山東省青州市龍興寺遺跡から出土した南北朝時代後期の仏像のうち如来像を取り上げ、その特質と地域性について検討を加えている。

費論文は新疆ウイグル自治区のウイグル人における中国語学習を扱ったものであり、現状の調査に基づき、ウイグル人が中国語を学習する上での問題点について検討をおこなっている。

于是近年問題が顕在化している地域間の格差について、その解決のために所得再分配機能の強い税制の確立、社会保障制度の拡充と政府財政投入の拡大といった「先富」から「共富」への調整が有効な措置であることを指摘してい

る。

言語研究としては、石村広「漢語動詞結果補語搭配詞典」補遺——結果補語になる述語について」、南勇「近代中国の言語意識と『日本語』——中国留学生が編纂した初期日本語教科書をめぐって——」、劉雅新「中国語教育における『借用量詞』の一考察——『臨時借用量詞』を中心に考える——」の三論文がある。

石村は中国語の文法構造の研究における結果補語の重要性に着目し、そのための基礎作業として結果補語になる述語の調査をおこなっている。

南論文では、一九〇〇年代初期の中国における日本語教科書の検討がおこなわれ、漢文調の文体の教科書から、口語語法体系の教科書へと変化していることを指摘し、さらに中国での言語改革との関連についても言及されている。

劉（雅）は日本人の中国語学習において量詞の学習が不十分あり、それを打開するために「借用量詞」の学習が効果的であるとの提言をおこなっている。中級上級の中国語学習には文化への理解が必要不可欠であるとの劉の指摘は、外国語教育に携わる多くの人間が共感できるものであろう。

以上が掲載論文の概要であるが、今回は多様な分野の先

生方に執筆していただいたために、内容の統一性には欠けたことは否めない。しかしその反面、現在の中国研究の様さ、まさに「百花斉放」の状態を反映したものになったとも考えている。多くの方々からご批判、ご意見をいただければ幸いである。

最後に、中国関係の研究に携わっているわれわれに、研究成果を発表する貴重なチャンスを与え、本特集の計画をお認めくださった戸部学部長、編集委員会及び文芸学部の全教員に厚く御礼申し上げたい。

二〇〇六年一〇月二三日

劉 穎

石村 広

小澤 正人